驊騮全書

之巻

ケ5
83
2

宮城縣立圖書館

宮城縣立圖書館 貴重書 第一卷

驊騮全書

二

騾駒全書巻之第二

同御厩之作事

一人の厩の図

二人の馬と厩の図又ハ御厩の図

三馬の清水の図

四図引出の図

五図引付走き走り初り

六馬の手綱の図

七馬を引御用の図

八出雲流の引出の図

東洋文庫
柳氏藏書

九馬の出入

十四貫目

十二貫目

十馬の駄賃

古駄中ハ馬代御同

右ハ引ル馬の手当馬の

武家ハ武家の道中の

一一朱銭 一二朱ハ 一三朱銭 一四朱銭

一ハ人の間 一駄 一歩代の手当

一路ハ人の ハ

一奥ハ御殿ハ関所 一一文字屋

一小荷駄ハ ハ 如右東ハ

一四里 駄賃 者 一宮家

一陸の名前

一四き名前

一鞍の名前

一轡の名前

蹴鞠全書巻之三第五

仕方之　百聘之事付　馬遊具之名所

一人の脇付之事　一の脇付　一の脇付

二人の脇也　二人に向ふ　みを又一方

むすびにたちする馬付之事　人の口傳

くちぐちのようふなり

二人の馬付　馬をも沿付之事　引之馬

先むかうより足付之事　次に馬付之事

次に尾ちをみて馬付　馬付九付之事

又たちのきて馬付之事　右付之事

[illegible]

[illegible]

五

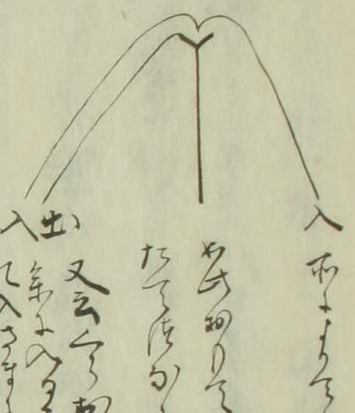
六

みしかくも致無し　此付手綱をとりて馬引人も
手綱をとる人も其手之引手のおしへ候まゝ
満足ハ御用ニかくるべし　又うるさきには目あてと
おくれもしては無難たのしみなるも事ありて引
折り抱して其人の御為ニ引候ハ目あてをもつら
せて一人にて引し出来ぬ物なり　又是非綱にて引はてる手前

七　馬を引て御用ニかゝる時ハ乗手を大事とも無し
つゝしみをぬきて其紀目用無し　うしろは馬の
あたらさしたまひ　手中へ入て
左綱を持ち　中間手綱　あたらを取

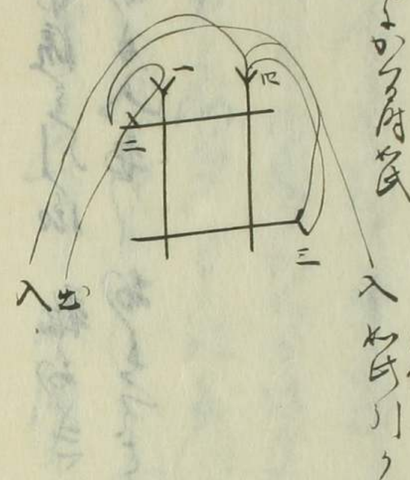
八　出京流之引様　鞍打きハ桜馬をハ一方を出して
見事ニ入無し　物を出し引候やうに致候
べし

御前



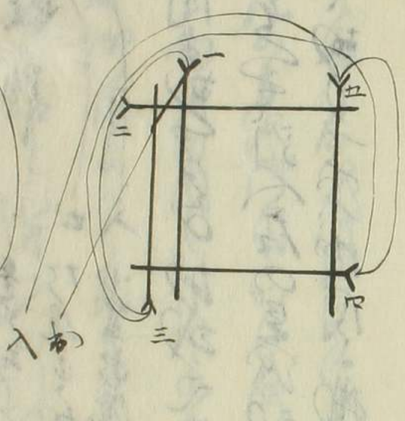
一三方御用ニ付ル所図

御前



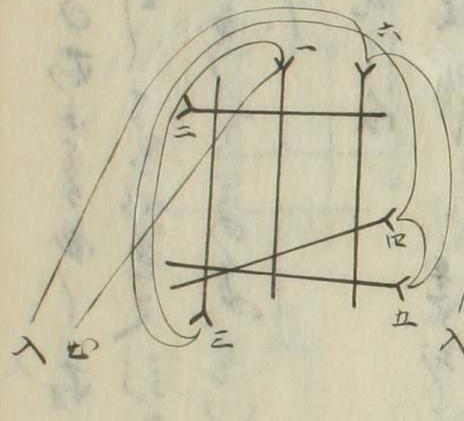
大坪流図形

一四方見参ニ入申候



大坪流図形

一五方御用ニ付ル所図



大坪流図形

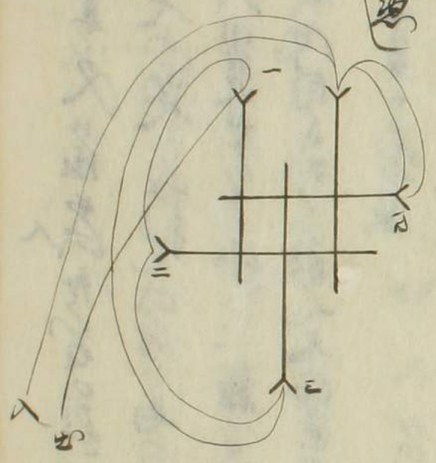
九馬の前八の目の所より角へ出る引
かけ申日にて馬の目又引
角へ出て其角にて其角
を馬の角

大坂流の引様

少左衛流同手

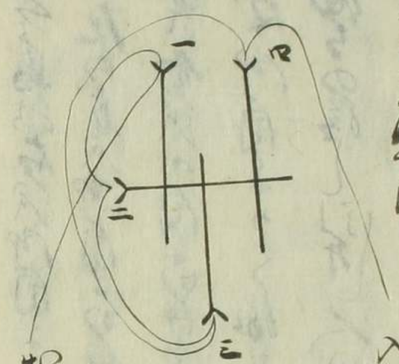
十四番御間より出る角の切こと先角にて引
出て其角にて引八右の目に引き馬の右の脇より
出て切て御間より掛て出る人の引手

御間より出る角にて出る馬の右御間より掛る
日にて九の方御間より掛角へ出る一ま
右より角へ掛て出る角より出る人角へ出る
角へ二度御間より掛角へ出る馬角へ押入也
角へ金物の落し引手人の引八能こいる落とも引手
人の引様

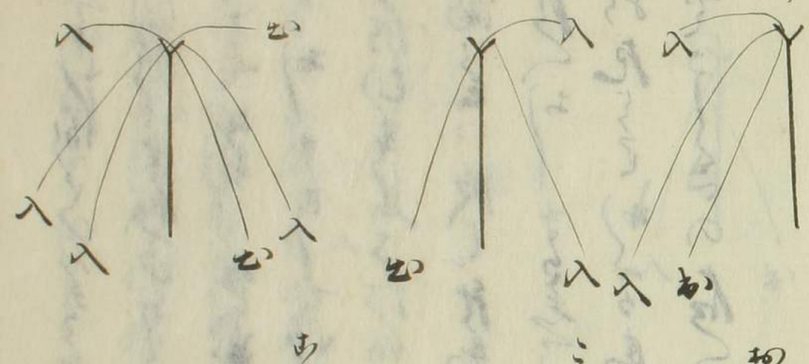


少左衛流同手

十一

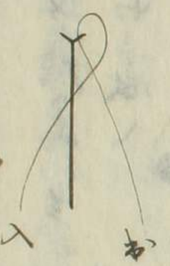


十二



御前

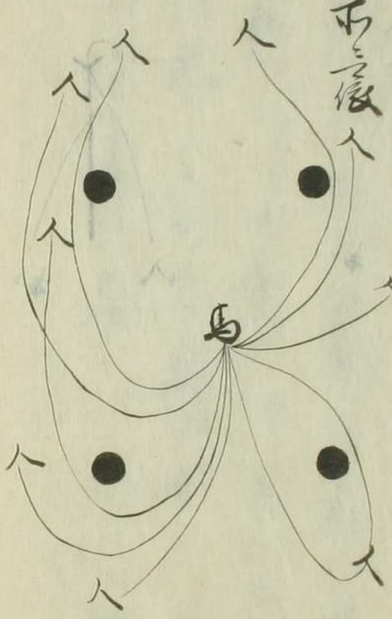
御前



十四 殿中ニ而ハ出殿御用ニ而ハ馬の角を右ニ傾キ
御用ニ付いろ〻と御覽せ候ハ花ニも御用の節ハ
又中ハ殿先陪殿御付角を右ハ〻ニ御用の節ハ尾
を高ク御用ニ付いろ〻ハ入ル事ハ出ル事ハ細ハ

[illegible]

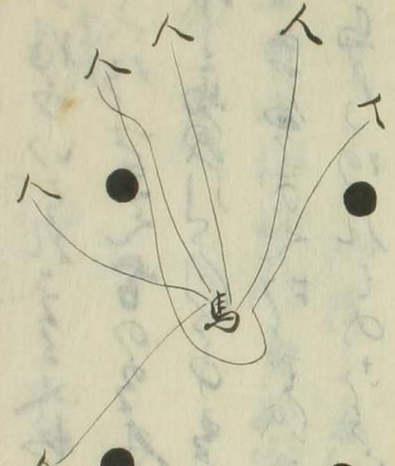
軒



十九 [illegible]

[illegible]

[illegible]



十六 [illegible]

[illegible]

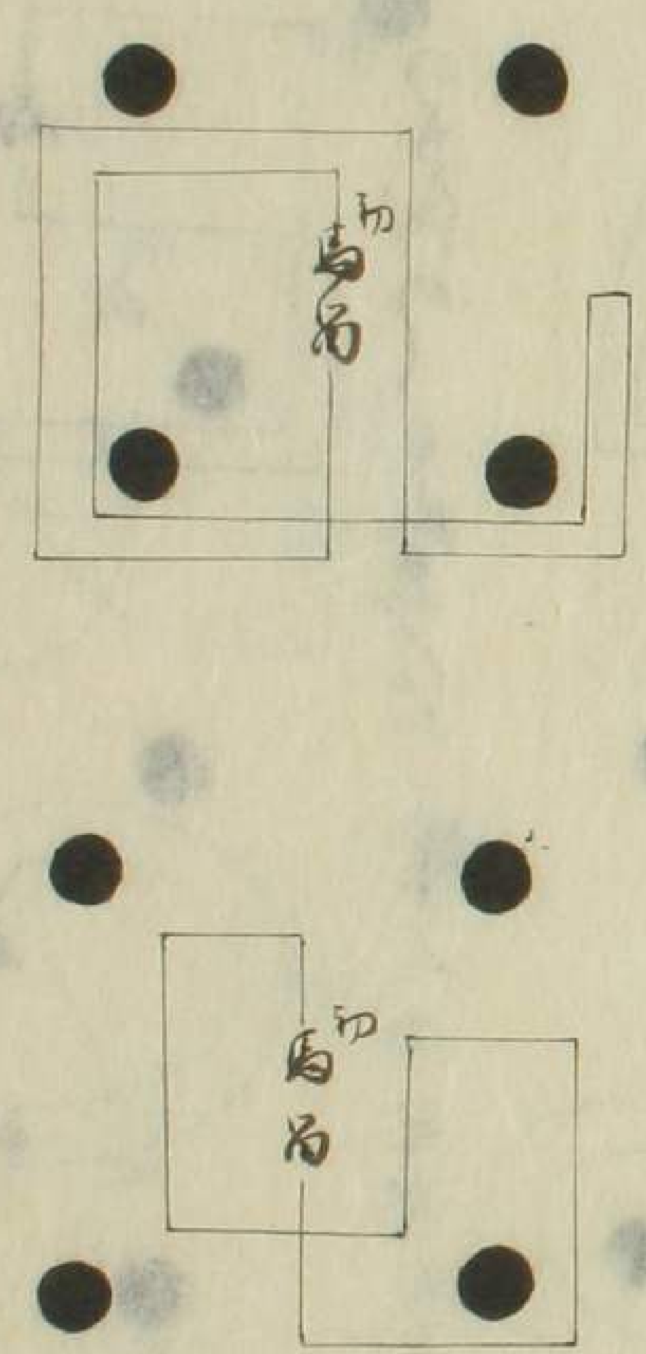
[illegible]

鞠之は知行不及庭家にて鞠をなさるなし
公方様並人の前にて略せらる也、前々は西面に其庭を
られたるの餘りなりとすゑにて家の可謂之鞠也なれば
鞠とすると申は、かゝりの木に得意しつらへかゝりを
の枝に得てうる也かゝりといふは也うちの盡之に得れ者
飛鳥井にて揃へてはもれきるの文、林にて紅葉に得るも同前なる松
也、雲井にてはたゞ一家之習の前の木に鳥居得て敷ある宿
一 かゝりの前に鳥居は何の間にすて立て通るは、近くにて
の外にて、家鞠まろ之かゝりは候、家する也ちかく、あくかく
さの間に鳥居得れものかく之かゝりは候の前に一八

枝を一八すつ一つゝの枝に鳥居得て、木は其所へ
かゝりは一本の也、得ん為よ捨之、し也也、打入る家
ろ也、前有無之候

一 一 切懸之事

斬



軒

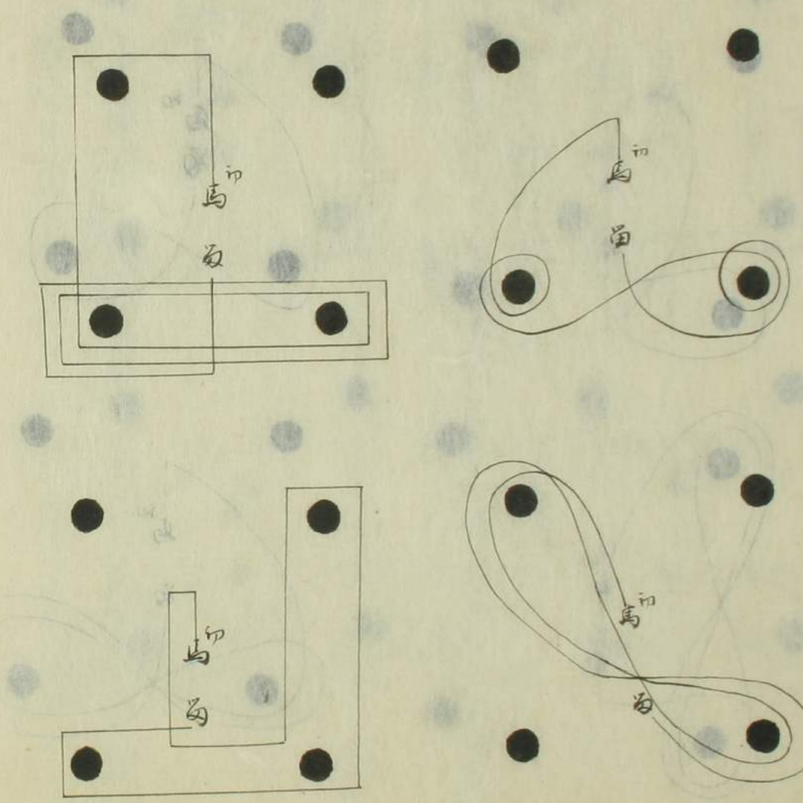
軒

軒

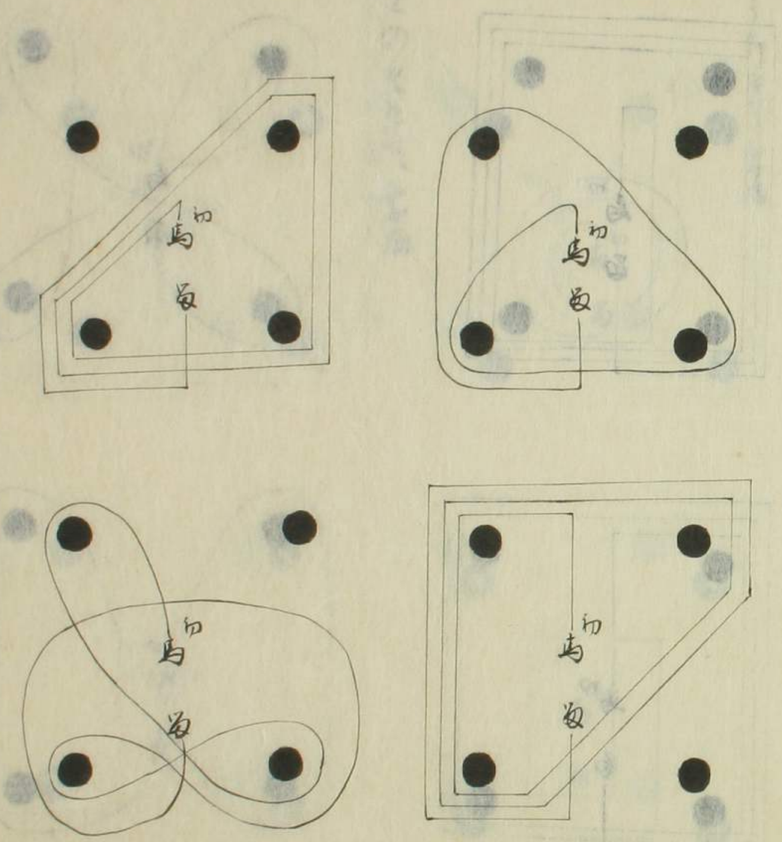
軒

軒　　軒

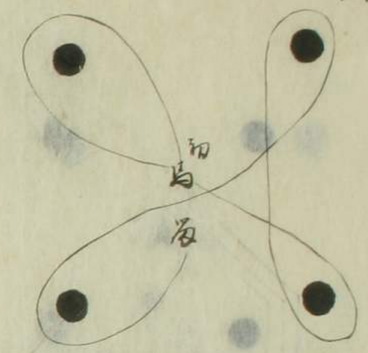
三本懸

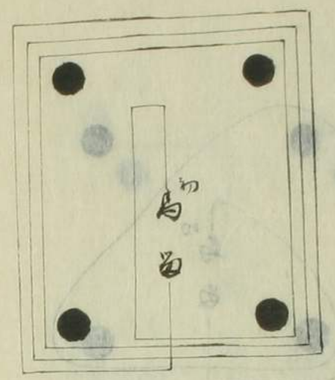


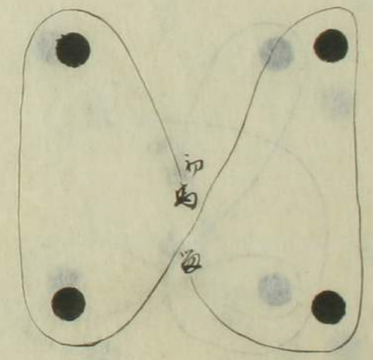
軒　　軒

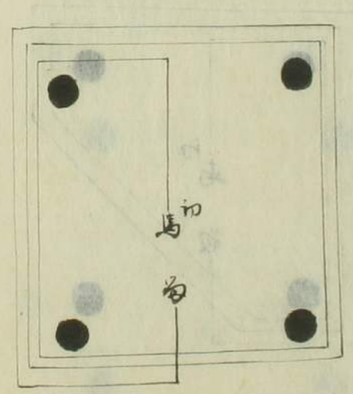


四角



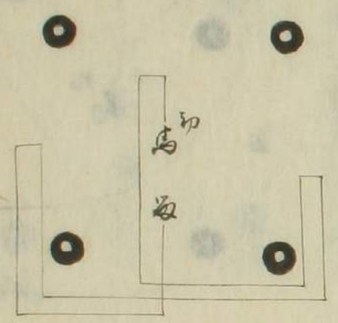


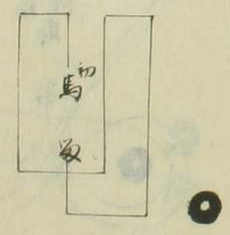


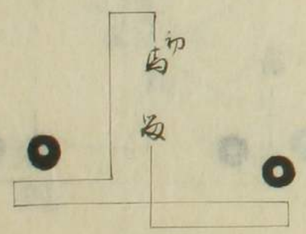


一懸のうちうて安信

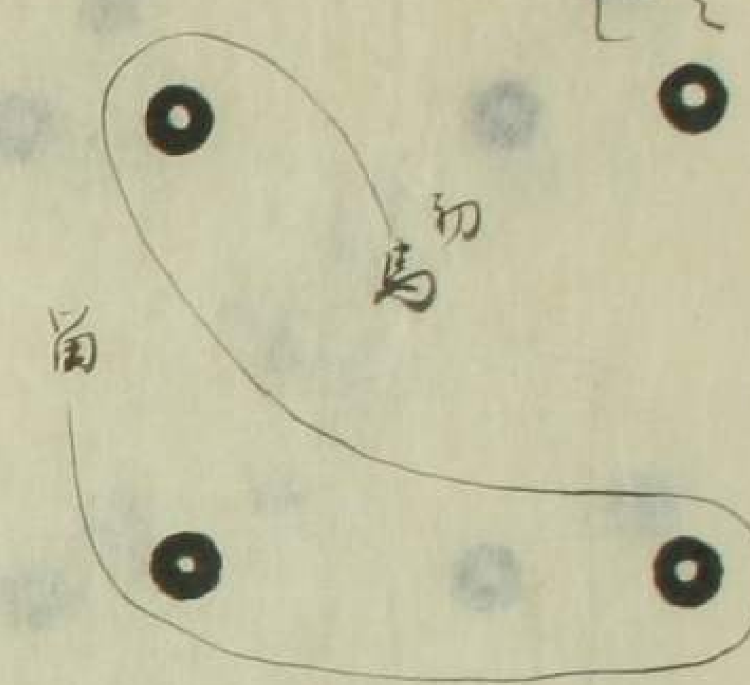
本とのうきうて安信

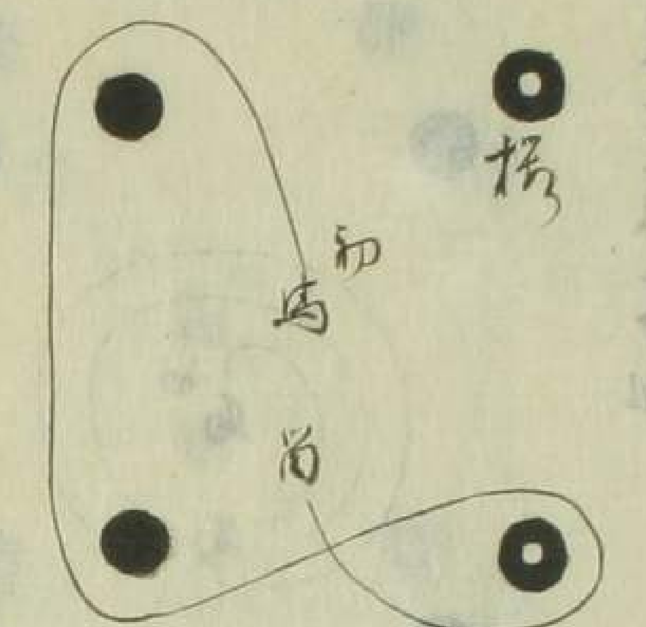


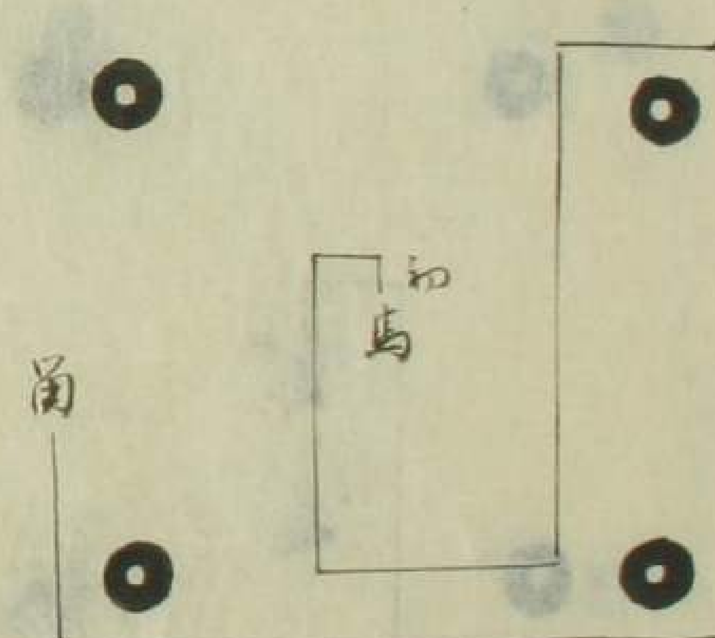


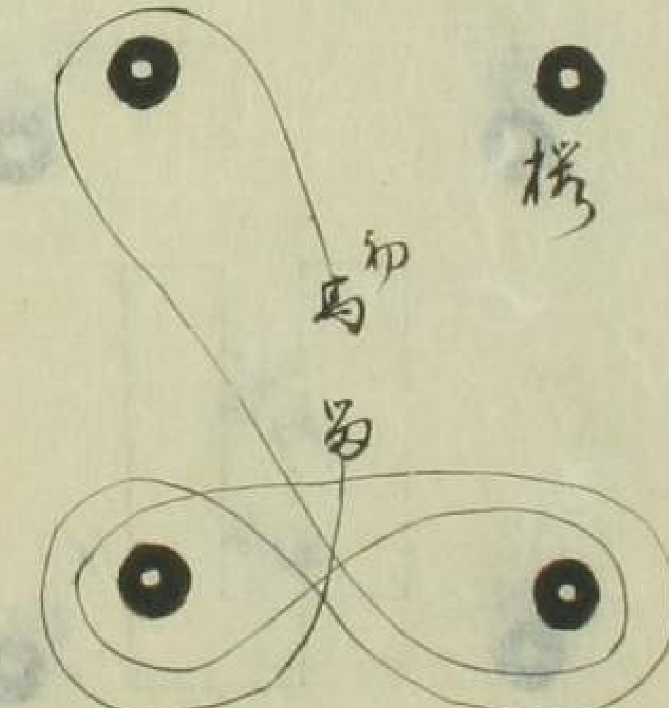


四季之木家庭南むきの懸

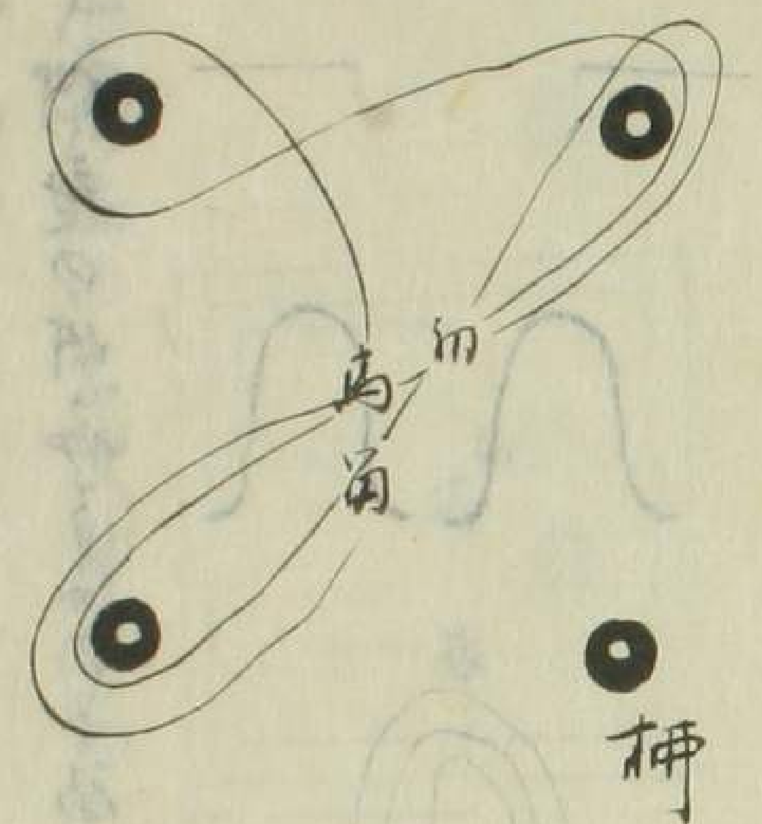


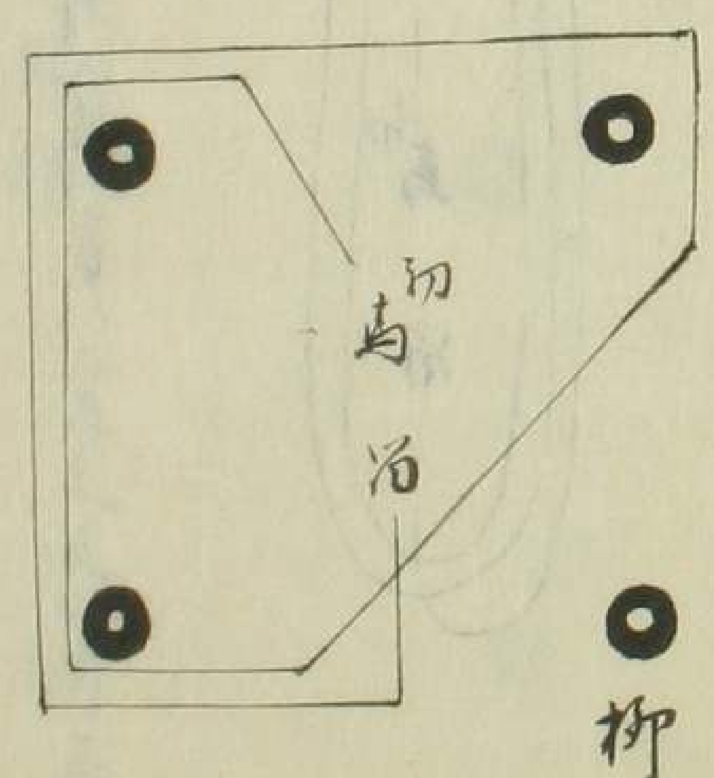




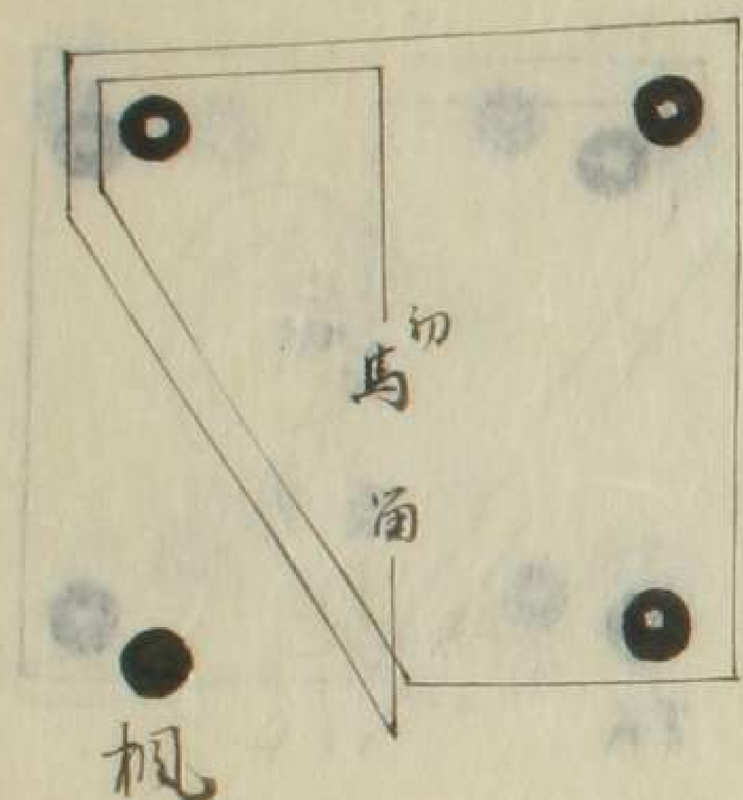


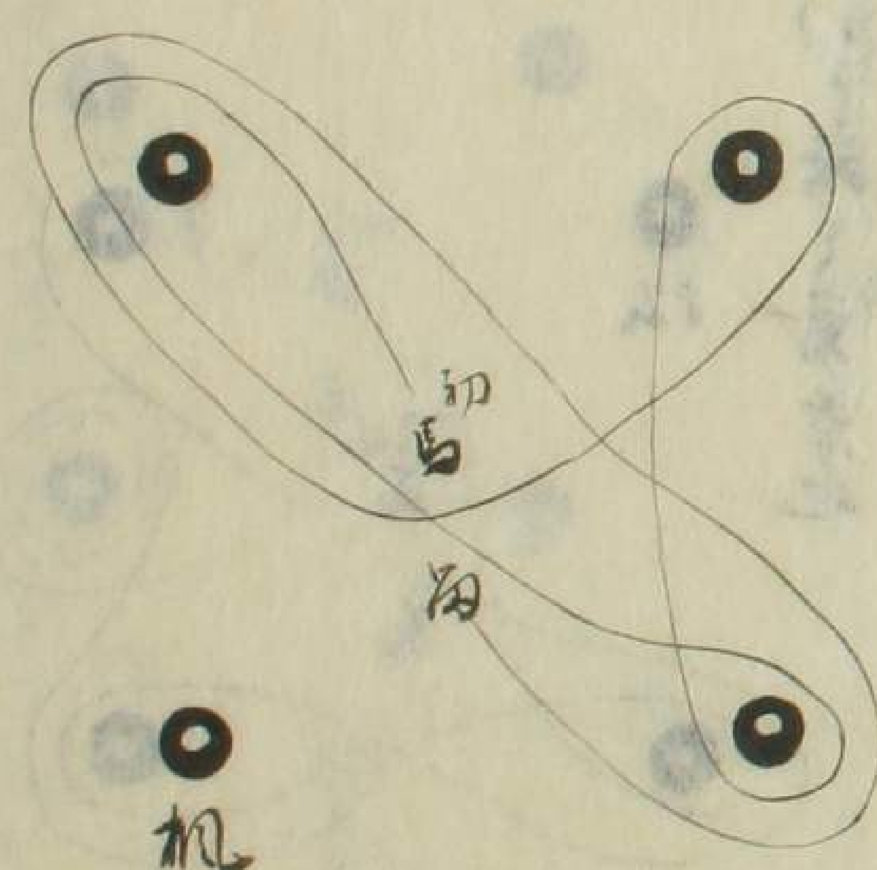
以上春





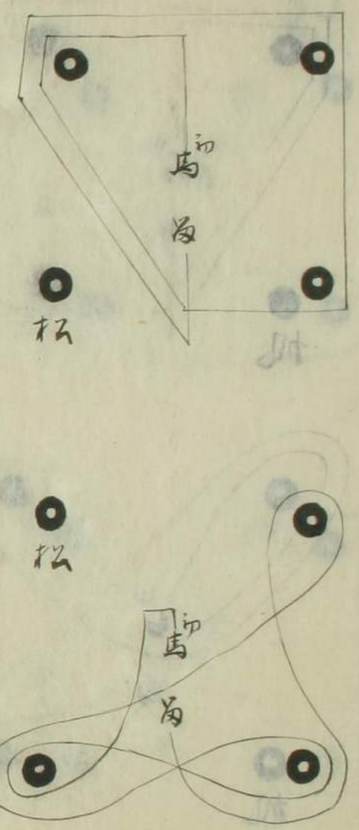
以上夏





以上秋

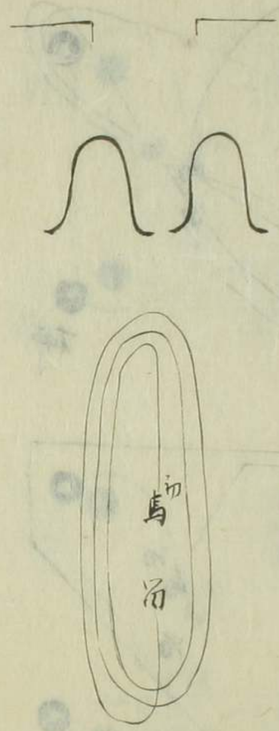
切



右図の事紙数多くしてかく略く勇者也

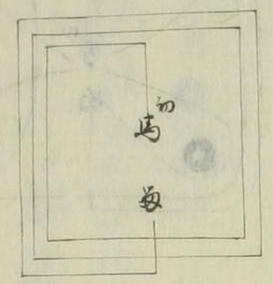
一奥ふかく御殿の件多くよの通り

御殿



以上

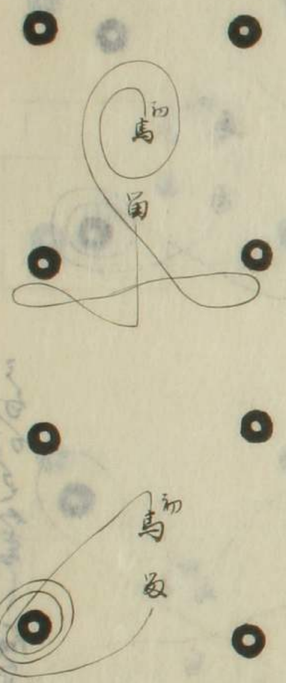
切



此方伊流の事例かく写為へ一方八三反一方八二反又一方二反

一小笠原流の図の事例打く敷成さるべかりす

一本懸



他の馬場是

二本結

先ず二度結ぶ

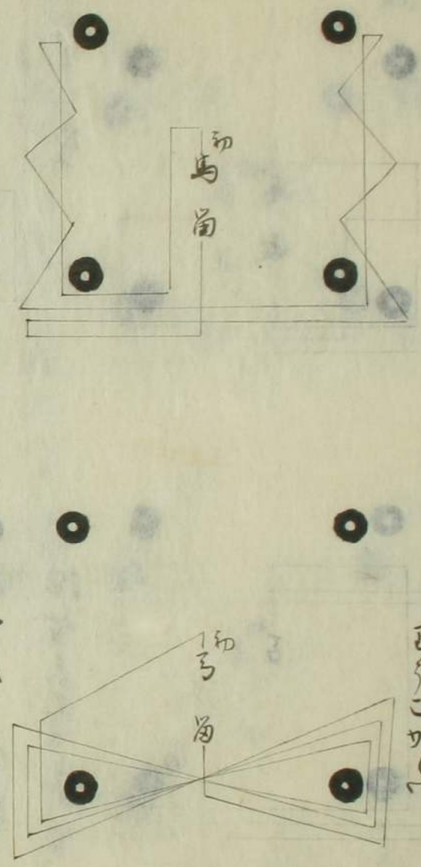
次に結び目を作る

雪結

一文字

三重結

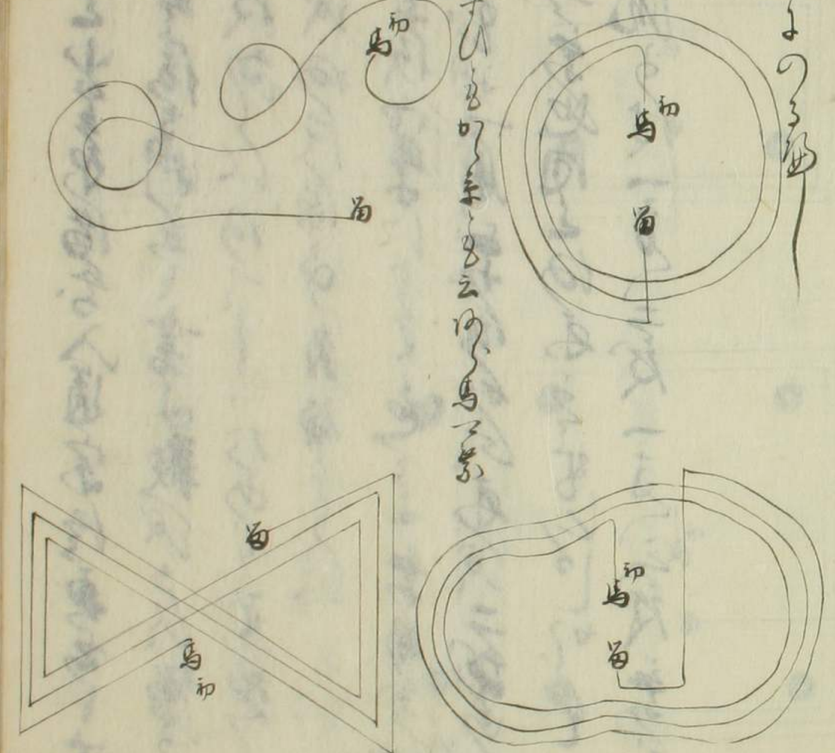
陣羽織結



一年度は家風年度の時は鞍風さしを用ゆ

一惣別元長書の図之如く馬の本の所

小車留より

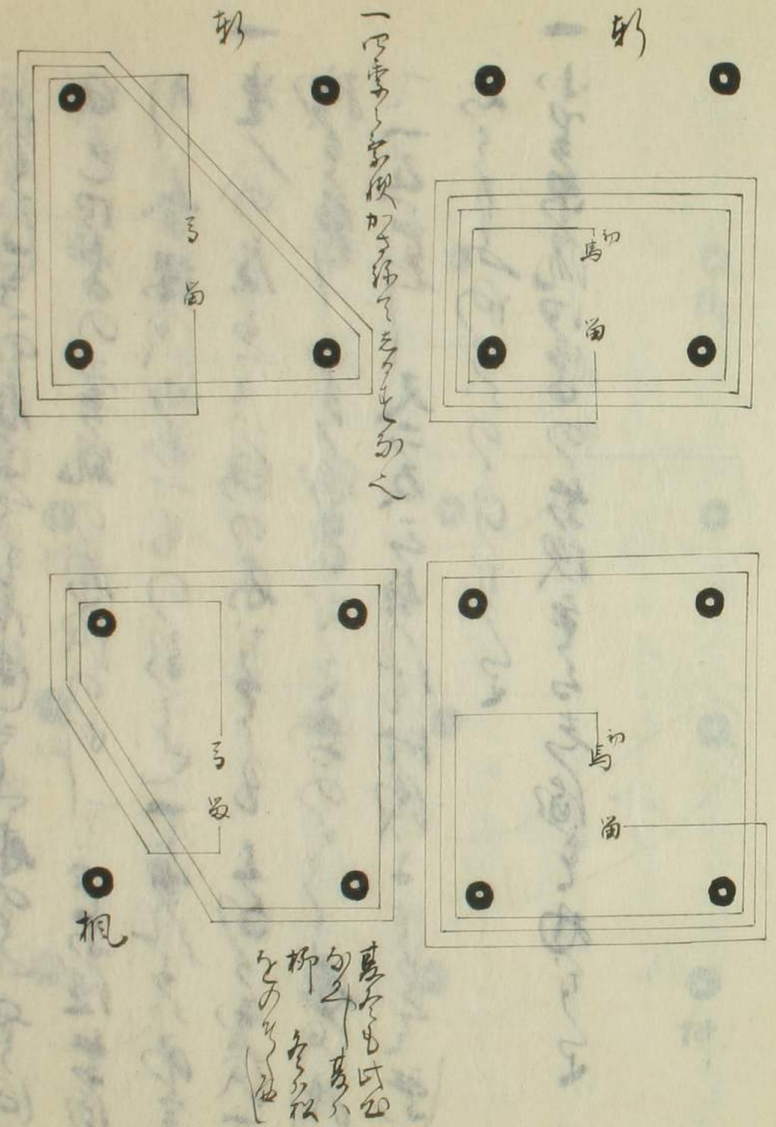


以上少年流儀入道宗信更ニ少書加ル

一白質ニ傷ヲ制セズニ書ル敵ハ敵ニ傷ヲ受ケシ
木ノ枝ヲ以テ切ルベシ　地ニテ魚ノ来
ル馬ハ切ル所ヲ知ル方角ヲ

一魚ノ寄様四事ニシテ色ニ寄ル者アリ光
四事ニ寄ル者アリ用ニ寄ル者アリ二種ニ
寄ル者アリ地用ニ寄ル者アリ

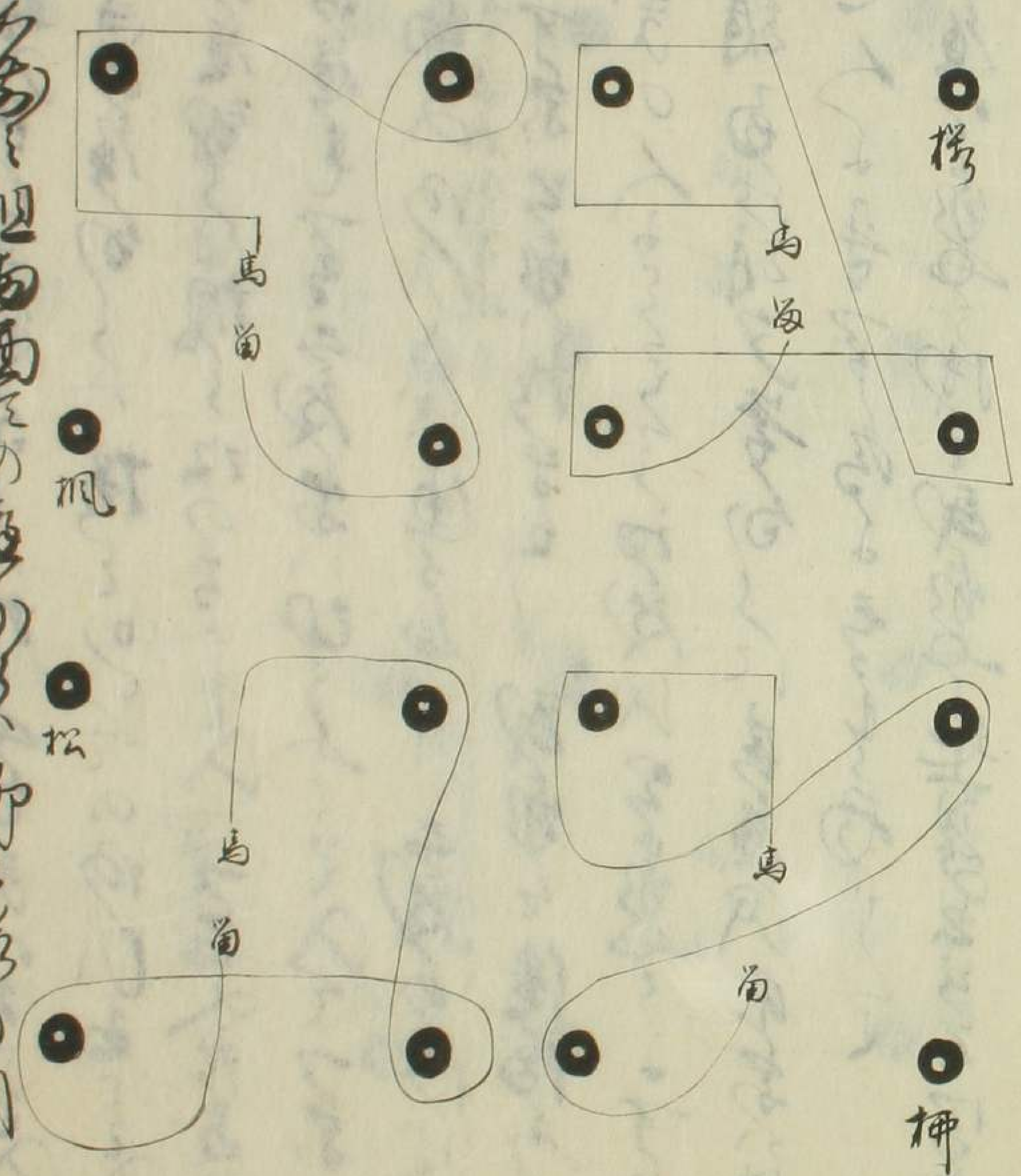
一大海流ノ付一方ヘ二度一方ヘ三度寄ル事

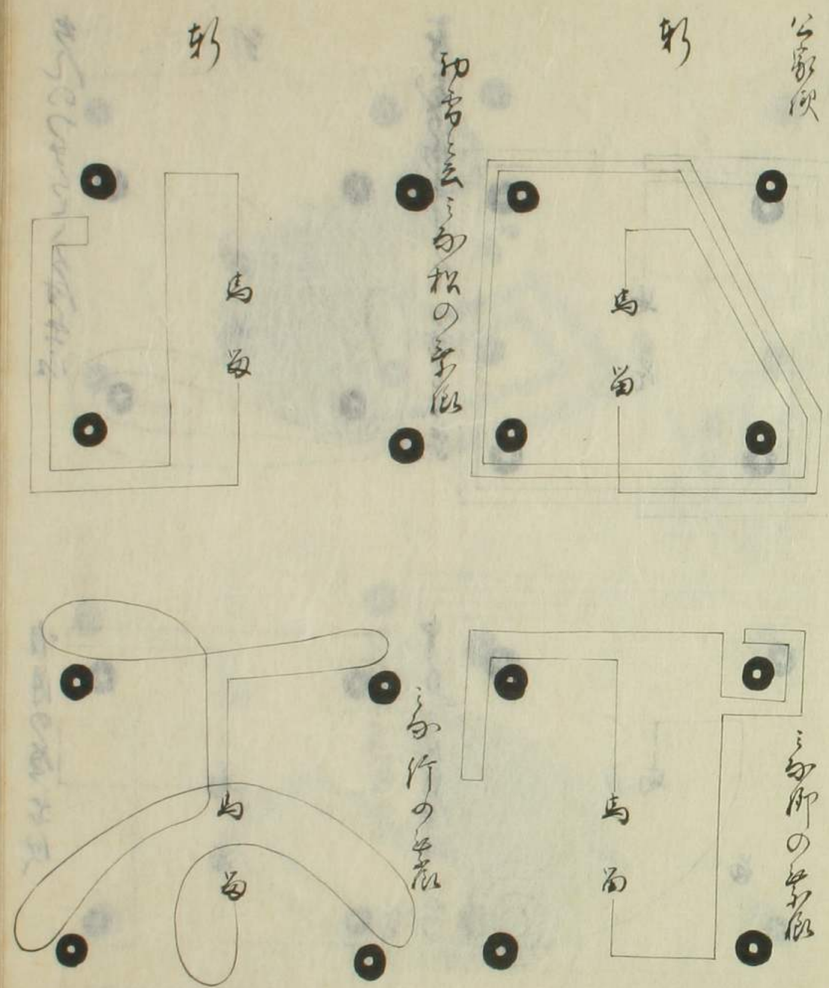


とかくむきの庭にても植込ミて木のこゝろせすゆゑ
四造四季の花残の木の町にて一ヶ條名所
列春櫻の花の咲きて一本も上のの定
一 生人の庭にて小松の木なとも上の一本
残る庭へ東樹の木とも家の中にて木残
て一五宗十又三五三本も時分にて家
志とりふ所への定
一 小笠原流四季の気候を志たる事

一

家庭の中に但雨庭の庭前より柳と櫻の間ゝゝ




馬留
馬留
馬留
馬留
馬留
馬留

馬
苗
馬
苗
馬
苗
馬
苗
馬
苗
馬
苗
馬
苗

一小笠原大膳亮長時

同　右近亮勇慶

此面人自判ゆえ

蟬蝙全書

12

騎馬全書巻之四

同鞍之次第

一鞍之名目

二師子の大事

三鞍の長さのこと

四鞍之法度

五鞍の名別英図

六馬の寸尺之別名

七三十二名鞍の打形の名図

八波の名目之事

九かつら長の鞍のこと

十一すき鞍之事

十一寸すき鞍之事

十二打形のこと

十三三ツりんの鞍

十四桜うり形鞍

十五さんおのこと

十六 面影の歌
十八 山家山行
二十 [illegible]の歌
廿一 天地の歌
廿二 [illegible]
廿三 [illegible]
廿四 [illegible]の歌
廿五 [illegible]
廿六 [illegible]
廿七 [illegible]の歌
廿八 [illegible]
廿九 [illegible]の歌
卅 [illegible]
卅一 [illegible]
卅二 [illegible]
卅三 [illegible]の歌

卅四 [illegible]
卅五 [illegible]
卅六 [illegible]
卅七 [illegible]の歌
卅八 河[illegible]
卅九 [illegible]
四十 [illegible]
四十一 [illegible]の歌
四十二 [illegible]
四十三 [illegible]の歌
四十四 [illegible]
四十五 [illegible]
四十六 [illegible]の歌
四十七 [illegible]
四十八 [illegible]の歌
四十九 [illegible]の歌
五十 [illegible]の歌
五十一 [illegible]の歌
五十二 [illegible]の歌
五十三 [illegible]の歌
五十四 [illegible]の歌

五十六 昭和天皇しのぶ
五十八 須磨りの歌
六十 前後の歌
六十二 月四首の歌
六十四 うぐひすの歌
六十六 月あてる月の歌
六十八 海辺の歌
七十 岩にうぐひすの歌
七十二 鳥はねの歌
七十四 沖の歌

六十七 月の歌
六十九 うぐひすの歌
七十一 時鳥の歌
七十三 うぐひすの歌
七十五 九月の歌
七十七 鳥の歌

七十六 うぐひす 古歌
七十八 春の歌
八十 秋月夜の月の歌
八十二 海辺の歌
八十四 老後の歌
八十六 月夜の歌
八十八 坂の上の月
九十 海辺の歌
九十二 四月九日の歌
九十四 まつの歌

七十七 みち辺の歌
七十九 いなづまの歌
八十一 雲にれの歌
八十三 青海波の歌
八十五 みさごの歌
八十七 中秋の月の歌
八十九 月の歌
九十一 岩石の歌
九十三 月の歌

九十石ちかく免ぜらる

九十石無遠慮云々免ぜらる

九十石海もとの免ぜらる

九十七石ともの免ぜらる

九十八町ばかりたかの

九十九石無所望の免ぜらる

百石拾石ふの免ぜらる

百一石ものの免ぜらる

百二石ばかり免ぜらる

百三拾石ばかりの

百四拾石ばかりの免ぜらる

百五石ばかり

百六石ばかりの免ぜらる

百七石ばかりの

百八石ばかりの免ぜらる

百九石ばかりの

百十石ばかりの馬より

百十一石ばかりの免ぜらる

百十二石ばかりの免ぜらる

百十三石ばかりの

右一百有餘曲

騎駒全書卷之第四

鞍を置く次第

一まづ一巻に云ふ〳〵馬の先鞍を置くに鞍を置く時は先鞍を置くと云ふて鞍入うるしと云ふ先鞍とは何ぞと問ふに答へて曰く二百曲ふ二百曲ふ乃ち大事長師のものと云是馬のみちなりまた乃ち七の背まてなを此所なを此所也信也五て信なりと云

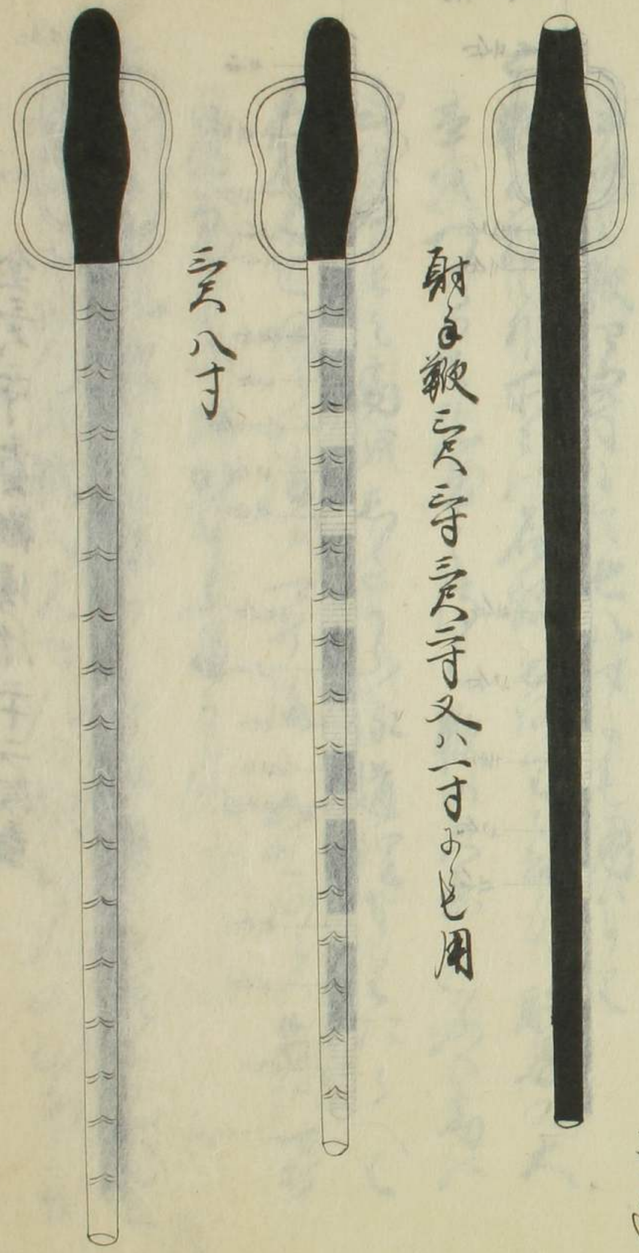
作師子作　問師子作

三鞍の長さ二尺七寸弐分上下但式すの代必切二ツ

を一寸二寸ほどくみしるしきる毎すべし極るたる
也つなぎ目はなるべしかるを穿て射むち用る恐
のかるべしるる毎に緒を結ぶすべるべしかるを
竹の根のむちにふりまたるを用たのるべし黒うる
ぬるべしかるべし丁用當皮ハ斜砂を毎しるを
當皮三分用くまをたるべしむちを穿て鞭
むちの切てもち切るべしてさへ出るを切て
四 小笠原情別伝されり場後世鞭を竹の根
にて毎しなるさ二尺八寸計とりはなさ寸
八分ハ出るのむちハくまを御たるべし

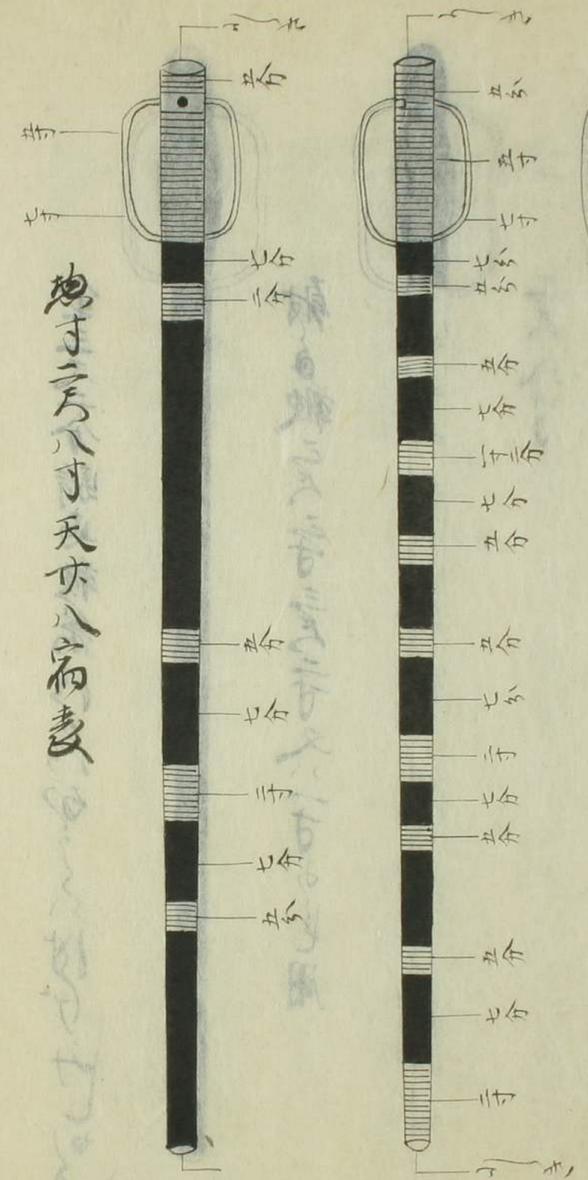
はたらかし又ハ出るを鞭ぬるべしかるを処を
けつるの小笠原流のかなしんを又ハ人の腹
はるのはむちのらるを矢をとりはたらかるべきの
大射鞭よりつるのかきもて百度をとりはたる
間式をとる毒てをとりつる仕るべかるを
五 鞭の長ハのかるをとるかる鞭むちハ切るべき
矢のをさをとるを鞭出羽を陣の鞭長ハ一尺
小笠原備前及桐原を鞭を使ハ長ハ鞭

金三尺二分騎馬鞍系法あるべし



射手鞍三尺三寸三尺二寸又八一寸より也用

三尺八寸



金三尺三寸責鞭図所二十二桐表

地寸三尺八寸天竹八宿表

里の鞭と云るものは打の数七又は八打也
時宜を鞭用事なれども七八すの内用なり
六鞭の数不所定所数白河と云る 所謂の大
事成つるを張弓し伝る鞭の方言ふる為
白河を高成ると云る風道理なりたるべし
然れども世間ふ法成ふ法より法ふ世間ふ為
信用しなれば八口ふ為ふ
七小笠原流鞭と関流かく形如奥の名所よ又白
笠一式めんの鞭文又ふ式めんの鞭かみのむちる
いふかるもはなる

二神より　の歌又少彦名の歌と云事もあり
三行　京の歌
四けはのむち
五見返り　の歌又すくなうち歌も云
六水持の歌
七宮ちらひの歌　又きんちきのむち
　あつの笛の歌　ちはやぶるのむちも云流も
八波ゆむち
九石分歌　ふう車ち歌と云流有
十橋の歌

十一書面のむち　波のしのむちも云
十二雲の歌　きんの歌　波橋のむちも云
十三月の歌
十四ふるの歌
十五ちはやのむち
十六ふらひのむち
十七ちんのむち
十八あみ歌　高ち　右ささ　法歌　ちち
十九さされのむち
二十ちの宮のむち

世たんちの歌

世一地まきの歌

世三須原山のむち

世四池のむち

世五はるゝのむち

世六行幸の歌

世七又世むちゝゝ

世八はるの歌ゝゝ

世九むちゝゝふその曲の過て歌用おりてその歌

世十ゆきゝ引ゝ

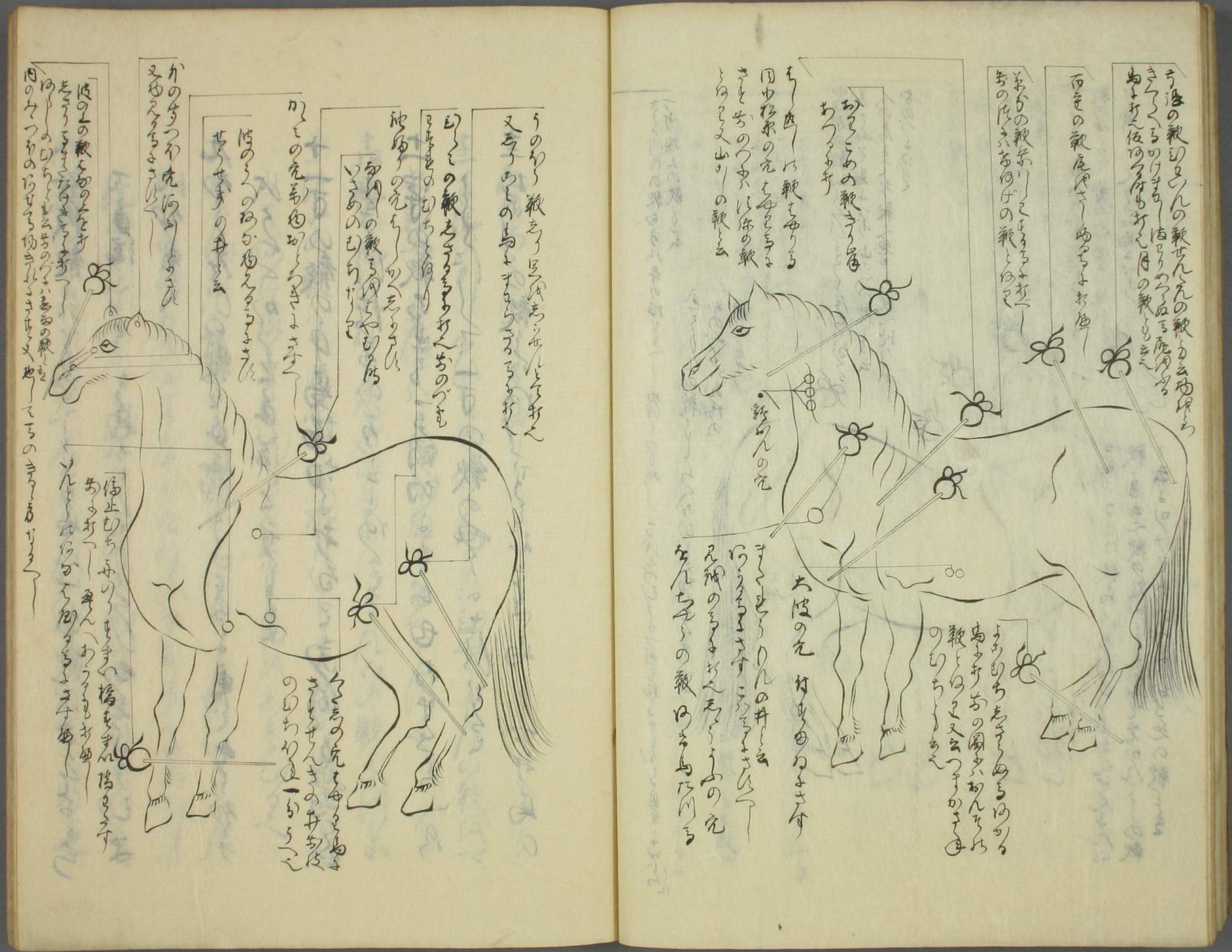
世十一はるゝの歌

世十二行幸せんえんのむち

人引ちすてすり毎し
第十三 引くさの鞍上下の口引くとうけて 下すあすまへる事可勝いて雲雀のうえ流めてむかふ白ちて候る
立てくきたる川そ下すあすそ面し 土くち馬り志見え候 又前なる乞ふる斗つ左手すね佐杭の鞍と云
第十四 はつ佐の鞍汝よしそ事そとし はゝ見人引馬雲よ
上は鞍須すは鞍えうくはてと毎し 又志さら　せち馬すき見し
の馬すお毎し
第十一 毒雨の鞍人引人会
馬すそくきまにかけて志
きくぬくすす す并
第廿四 沙原山の鞍人引る又る須佐せんとてまん
又曲宗須も用ひてお毎し
第廿五 沙流しの鞍をまと
の川を陽すせんとてさまと
第廿六 ……の鞍毎すそ吹ますたん
又曲すも用又本のわの井と云段
第廿二 ……の鞍
……馬
馬すまて并右の足へ

第廿 ……の鞍汝ね子處をふるたつ川ちと并
第十九 ……の鞍かけを御をきるふたつきまつ并
第十二 ……の鞍志きるまんせんたんの鞍也つ松を又あまあんの鞍ゆふきる馬かりち
第十 ……の鞍むすきの馬志つのんそ并 ちちおちくせ真馬すおすけてく
第十八 ……の鞍ゆふた川をお引せたりまよ并へし
第十六 ……の鞍志きつる 両ちし 过そんうと 門をのしを洗いも
きそきるよう川を毎すの鞍ちりの流ふり
第十七 けんさきの鞍ちふきる馬 手るそるく右の御并毎し 又毒すつ
ふえのむちもも云なり

……の鞍はせまやりは寸き毒 志ええくかくぬ馬す并 右は汝よ
天返しの鞍ともつり 又月鉄の鞍とも云 わとえお……きるよ并て
んそ并毎し



八谷殿歌ふかきをしるべしとて馬代二疋歌代さしてまゐらせ
て返ふうとゆゑ申ける所をとりあつめてもつまし
に申ける
九月廿五日の歌を返ぬるよ申ける所をもとりわう
代うつかをもて返ぬとおもふ
十一すの歌の中馬湯切よりおりて家方に馬をと
ゝめ侍ぬるのゆへ
十一写の歌古道も一ふう切よりもしもさらへ
ゝてゝ一すの歌のゆへよさしかなる
十二月の歌ふかきを馬代二疋おくの

去馬場きまのむまに面敵の敵に可打たるみ
ふまるゝ打たるよりかゝるまゝ馬場
のうきなりしかまゝ行さんとおもふ
ゝかゝりけるきゝ方の馬場より敵
てゝ馬をはやめ来りし
去馬をかゝの馬場をまゝの言はたゝの敵
敵おもしふたのむちゝふゝの中の敵の
きゝしてゝ方のゝ沢さんゝゝ馬場密
のゝちゝよさしゝてさきゝ馬場沢也四ゝ
馬場の馬場えゝ寄ゝけてゝゝゝ

むまはゝまちふゝゝゝゝ敵おの敵に二十
ゝちてゝ三ゝまゝてゝゝゝ敵かゝ馬敵八
ゝゝ敵ゝ馬ゝかゝちにさゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ山ゝゝゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
大ゝゝゝゝゝ馬ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ敵
ゝゝゝ山ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
胸騰の敵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

同の部より歌仙始まる上下句すべて去る
時は去れる
十九きりめの歌を軸にはきこゆるのもちに
うし後ろの方より動て来る
廿 清くの歌を瓜きりに成るまに折れたる
つきの月きよ見ゆ地面の歌を見る
廿一 山家の山ちかく言の人よひきてちかく
ちかう用ゐ又異の元にもかかる
ついかりにも何のもうしきへ色
らもそれをそ身に成ぬひきなりする

手綱かく
廿二 天地の歌ふたの歌さて
但馬の国より元信の馬よりも可用
ちかく大坪流より又出雲流より天地の
綱ふ言さる用ゐ歌の歌の
して言に言ふいさうもふけ月天地かう
仕綱言のきあんをさけすべいうもきく
うのうちふなりきの行方の上四
文に行ちる句行一句行きて又四流より
句を後に行句一方に行句一方にさけて

ともかくもしまの口にきりて たち引かけし人の引く
むすひて 轡のかゝへ結めてきるよりけて引つくれは手綱
は轡のくゝりたりて引さしてあつてきるもうけを
又かくる口のむすひは必す口留し 此手綱ゆてとまる
らくきる手綱なりとも

廿三 ますもに海のいろ馬は 家中はいろちさ庵の手綱
御用船は綱ときて結ます手綱りちとて水付は
あちさまに結むすひいろとて手綱とこれ足は
ゑてつてせうす縄し手綱と手よりかゝえて水付
御してみへき之 ますらうさう手 第一の手綱之

廿四 蓬莱金のなきしの時 手綱とらしくするに角壁
金は長さ三寸へくさるにうしの端にかへのわかにはなも
さすまのかおみちき中にかわて

廿五 口はいつはとかくさ世ちまの手綱世のなきとあ
ちまゑは宝来にてのゝ紐し

廿六 わうらはの手綱かへの中にて手綱ととまあ之
ゑくは手なてわらはゝもきまもり わらは手綱
たかはは足はさほりうきは何かりてすらぬ事
用なくてなにかにならひもりちいはなりて

廿七 一方は返しまさ綱は割らきて記録をわかる手の手綱

なほしかりとて可逆手縁ありし諸本の三とありしも
へて返ありし一もちの心ぬ事ハまうふさうる能とも
也とし稽古たりありて満らるかくし一ら伐おもし
廿一筆二の書にも有
廿八撥あるに屍をたる廿ハ右の手縁にはあまて左の方
写くとりて也事の異成中にかへしくにたる也とす文は
誤の形にえくその諸成何にあせて何しも前下
又記ら頭に手縁をとりらへて極富の何ろもの
急成鞁にそて川なるべき
廿九きに手縁成なるに先にけぬ方の手成中に定

なる方の手成にまかけ地しくし文手縁に鞁用ゐたる
へてかくる方の遺のはしまら用ても
三十大角手縁にて手縁成るにて諸成諸たらしくて
也事のつくれ引かくめて緒の急に内にての手縁そから
也へる呈成立うても申すへし
卅一小角の手縁にかう仲にもる遣て切り申成引ろら
也るよしくて何書のことろまても清事もをき
極し几大角のことし
卅二清ら切りに云ハ在にあらそて家なり
为へさしもとり也備　何しまうさるる　常としき

る すまてる馬にもつてあるへし
卅三 引しきといふハ九法ちらかにて円とらすかりを
くわりたるの事也
卅四 昔ハ草といふハ鞭ハ草のむしく常なり大方
つらねかるをあらぬ 物射るに専用とく
卅五 すゑといふハしの字のかたち口をあき馬に用へくたま
かね手に是非宗一十九すへて其所にまはし
は手綱は流に専用なり落に三まへの宗とも
のりまひ馬にのりて定法ちかきも用られぬか
卅六 くけ返しの手向にあきてきまにすへきやうまし

に届きて無し
卅七 波流の手綱ハ先鞭ちゑぬきて持て引かる手綱を
右の手にてしとり鞭のさきにて我流きて馬の右に
耳へ三度入て三度めに鞭のすそ耳の中へ入
てさきて馬の頭をたかく引あまて手綱ハ高く
とりて手綱をかへし川の方へ引きまて川の方へ
かくて脇て川の鞭をしてかゝり又引す
ろうハ手の間まて手綱にかゝりうす也
卅八 波度手綱是ハいつれもたかくかゝり流の手綱
あれち流わつまりに手の上ゆ手綱をたかく流下

[illegible]

西の海[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

さしつめて弱ふゐてゐける一度

口十 遊縄とハ手綱を以て八所(?)のまへにて手綱ハ
外にかけてしぼるふする事也ハ引返
手綱のかけの引つぼりさまりして水風する事に
みせて引き留して一寸入

口十一 山形手綱とハ右手にて手綱をとりて九寸縦
の山の形をなし用のさまし あり

口十二 高山形の手綱ハ山の形にさまめんとあり
状見て猶山をみるが如く持つの習あり

口十三 云手綱 是をさして用ひしての手綱ふして

一手綱にも手綱もかきまはす事のふれの胸懸に
くりまして女手かけて引きつ手綱まかして
うし鞍橋を持ちかけふりして引つかけする也

口十四 かくしの手綱と申事手綱を又打して
の指にて捻てかへすなり押なしてかけ引て
ごて鞍嶋一寸押捕にて馬にも不用

口十五 岩浪の手綱といふ持た手綱かけ是段
こして浪の志きてとさてさん浪状かさへて立
於右の足段かし浪てに岩嶋にても引ん
手綱つけしりて引母中すち引て立ふるへこの

鳥屋にてなつる又云鳥屋のちなるに右の羽ちかへ

かりに持て羽の所へはしめてかくさし傳するの時

のちに羽をはなちて鳥屋出は十五日して鷹にとらせ

かりたるへし

四十七 鳥飼云 鳥屋出にけなはなまて毛の所へをと

まへてさうちをすへし但し□之外も同前

四十八 中閑云鳥屋出は羽ちかへて其後羽をさけすへし

かけては拘鷹によりつきたる足にてゆるめかへ

とめを持て鷹鳥の時やしつくし大鷹秘書之

四十九 此時二ツ云鳥屋は羽をさしふるの古作

鷹は中すこと

五十 石切と云鳥屋出は羽のはかりて鶴の毛ま於の時羽

此は病れき鳥に其て中羽をはしけ引て羽の時て

羽のあまり尾つかし鶴のそれを物は手に

とうき書中しきため之秘の也

五十一 桐山の鳥屋廠に十九にあるまでに其の日の其

九月めての拘鷹羽の時羽をしとらせの隠にとる

くる丁はるかあし也けり

五十二 それは中にはふ鳥屋は羽さして人て候へ

鶴の羽に鳥屋出りけて後毛のさきて羽其

[illegible]

五十三 [illegible]

[illegible]の[illegible]より[illegible]

[illegible]

五十四 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

八橋にて杜若の和歌を詠じ給ひ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
五十七　[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

五十九　[illegible]の和歌を詠じ給ひ[illegible]
六十　[illegible]
[illegible]
六十一　奇の和歌　仰せの[illegible]
一首の[illegible]
[illegible]の和歌　又[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
時や[illegible]
六十二　[illegible]の和歌を八橋の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

七十二たちの長さ九尺の首
[illegible]
[illegible]
長さ一寸の長さ五寸の
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

七十六 [illegible]の事 [illegible]

[illegible]

の鞍 [illegible]

のいとを [illegible]

[illegible]

七十七 [illegible]の事 [illegible]

[illegible]

[illegible]

七十八 水車 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[

[illegible]

八十求力皮と云ふ皮ちりぬ皮敷の皮さ
[illegible]
[illegible]

八十一雲かつまと云ふ皮敷の先ちりぬ皮さ
[illegible]
[illegible]

八十二[illegible]皮[illegible]
[illegible]

[illegible]

八十三[illegible]皮と云ふ皮たれ[illegible]
[illegible]
[illegible]

八十四老設と云ふ皮さは[illegible]
[illegible]

八十五みさと云ふ皮地なる[illegible]
[illegible]
[illegible]

八十六　下座敷　上座　敷の内　下座敷
通り　ちゃうの　ちゃうの　ひかえ　ちゃうの
箸代　耳の内　おもてんの　わくさしへ　ためてにて
おもかけとして　張通し　一方筆の　おもへ
八十七　中書物　上座　ちゃうき　上座
物代　ちゃうとして　ためて　物態　永代
八十八　さうしき　板代　あるとき　敷の後　掛　文等
物代　屏絵　まて　門ちゃう　おとして　角　わか
ー　板代　わもの　西掛　かり　あるとき　絵
門ちゃう　まて　見　ちゃう　わすれ　角　ー　性

口絵
八十九　上下の　上座　上　ちゃうの　わとさ　あるとき　馬代
動き　門ー　まて　あと　絵　ちゃう　上座代
西ー　ちて　方　右の　方　わて　右の　きるとて　むかえ
代　門　おとして　見　すり
九十　ちゃう　あるの　上座の　ちゃうき　けし　あるとき
角　つとて　動　ちゃう　真ー　て　上座　ちゃう
板　て　動　まて　西　うま　ちゃう　すれ　ちゃう　ちゃう
まて　あー　ちゃう　なる　おて　絵の　くちゃう　ちゃう
ちゃう　ー　ー　ー　動　まて　上　て　あて　ちゃう

九十一 [illegible]

[illegible]

九十二 [illegible]

[illegible]

九十三 [illegible]

[illegible]

九十四 [illegible]

[illegible]

くちうつしかゝるを毋衣の上に
九十六 永遠いふる泥細道よりて人のうまよりおりて
下馬方ゆくも四一所なりけれはすちの馬んよ
綱うるしをうるうちかゝるを人のうしろ又綱うる
のをうしてたゝたてたる毋を人の歌よりゝ我
むまの屋しうを毋人のうしろい我むちにうを屋
ゆうちてきりゝを毋遠毋ゆくうるゆ
四毋一柳のなりうを人少毋衣流の毋一泥
うせうを道よりて馬うるの家九の泥
ゆうを馬の跡ゆうゆりて右のまゝて歌毋をう

て右の泥しのつを歌のをうゝてさを馬の屋しを
少人のうの方むまをさを泥よりて馬しの毋を
を四人のうをゆりしをゝ馬しのうゝ
九十七にをうゝふ泥せをき右をを毋をる
むまを行合をを家のうを荷のをる馬我九の
ちうの跡を右一行毋又右のうゝたるうの
跡しのうを一のをうの泥しを毋
方の泥毋はうを毋泥をあを
うのおりうを毋泥をうを毋
をうをを跡しをを

[illegible]

九十七　五[illegible]の毛織の[illegible]

[illegible]

[illegible]

九十八　[illegible]毛織い角の口[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

九十九　少[illegible]流より[illegible]の毛織[illegible]

[illegible]の毛織[illegible]侍の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

百本[illegible]毛織の[illegible]

[illegible]

[illegible]

百一[illegible]と云ふ毛織物[illegible]

[illegible]て[illegible]毛織

[illegible]て[illegible]

百二[illegible]と云ふ毛織[illegible]物[illegible]

[illegible]て[illegible]

[illegible]入右の中[illegible]て[illegible]

百三[illegible]と云ふ毛織[illegible]

[illegible]て[illegible]

百四[illegible]

[illegible]

[illegible]

百五[illegible]の[illegible]

[illegible]毛織[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

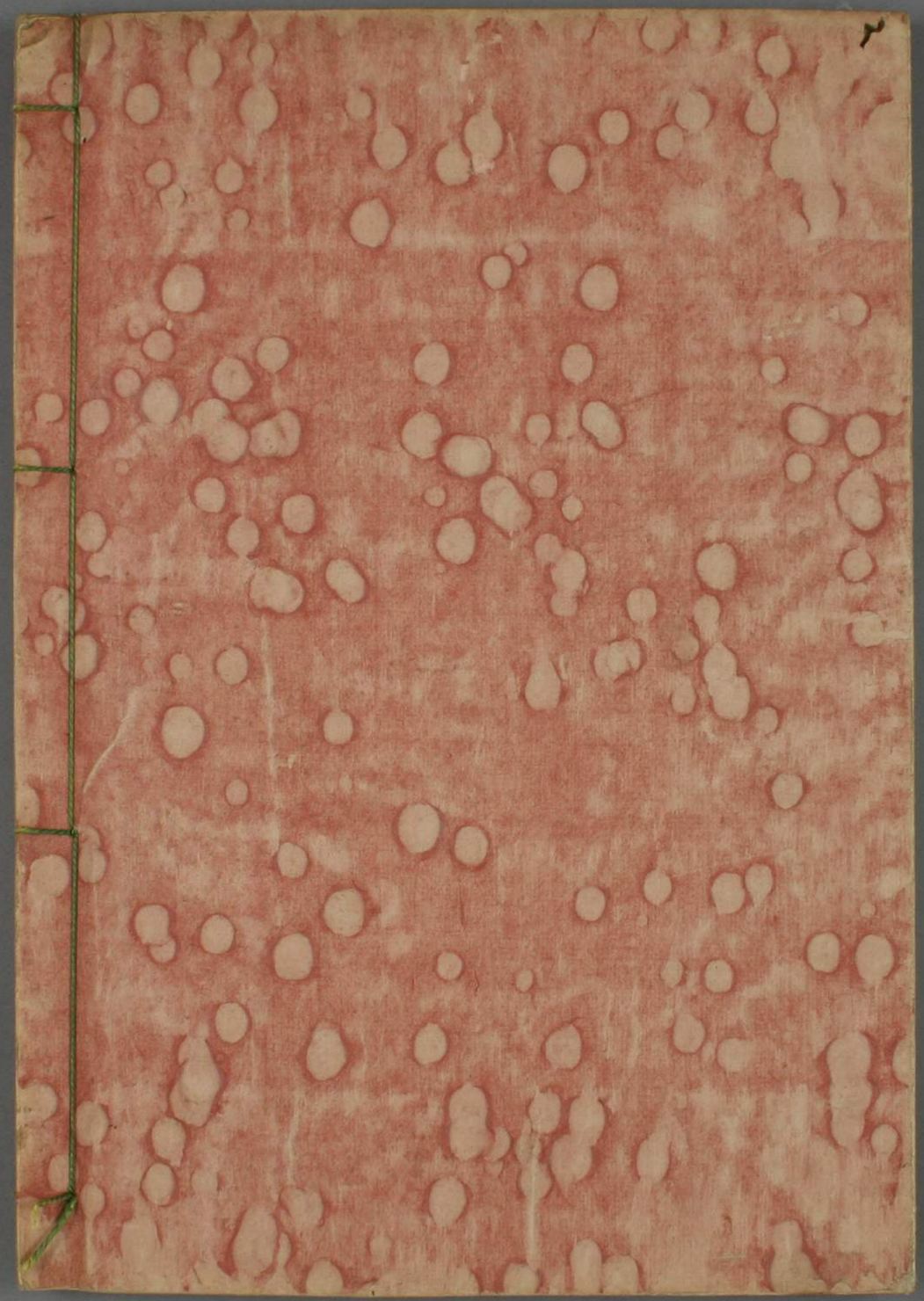
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

2

5